

相馬の歴史を探求する

# 凸凹新聞

2023年  
11月号  
Vol. 3

発行：相馬凸凹学会

人類の文化を大きく  
発展させた土器

## ドキドキする土器の話

相馬地区が早くから開けた土地だということは出土した遺物から推測することができる。地区内からは縄文時代の遺物が多数見つかっていて、その場所は三十四箇所にもぼるといふ。さほど広くはない地域でこれだけ多くの遺物が出るのは青森県内でも珍しいそうだ。それだけ多くの人々がいた証であると同時に、旧相馬村の教育委員会が遺跡調査などに熱心に取り組んだ結果ともいえる。出土した石器や土器の遺物は縄文時代の早期から中期（\*1）、つまり五五〇〇年前から四〇〇〇年前くらいのものが中心だった。そのころの相馬は県内有数の「都会」だったといえるかもしれない。

土器くらいで、と思う向きもあるが、あるいはなかれ。土器が発明されたことで、人類は食べ物を煮炊きしたり、あるいは保存したりできるようになった。土器の出現は、人々の生活文化を大きく発展させたエポックメイキングだったのだ。



弘前大学北日本考古学研究中心（上條信彦センター長）の調査によって清水森西遺跡（弘前市大字十面沢字清水盛）から出土した五所式土器（弘前市文化財課所蔵）

ちなみに、青森県の大平山元遺跡（外ヶ浜町）からは約一万五千年前の縄文土器が出土している。これは最近まで世界最古の土器とされてきたが、中国で約二万年前のものが見つかったと報じられ「世界最古級」という表現に変わっている。いずれにしても、「五所式土器」

### 相馬から出土した「五所式土器」

相馬から出土している遺物は、縄文時代のものだけではない。後に続く弥生時代（続縄文時代）、古墳時代以降のものも見つかっている。そのなかでも注目したのが、「五所式土器」と呼ばれる土器の破片だ。五所とはいうまでもなく相馬の五所に由来する。この「五所式土器」は学術的に貴重な土器とされているのだが、その理由を説明する前に、予備知識として青森県の弥生時代について記しておきたい。

（裏面に続く）

\* 1 縄文時代の始まりについては研究者などによっていろいろな見解があるが、だいたい1万6000年前から1万3000年前とする見方が多い。その時期区分も指標によって差があるが、共通して言えるのは草創期・早期とする時期が長く、中期といっても1万年以上におよぶ縄文時代の真ん中ではないということだ。土器編年による時期区分は次の6つに分けられるのが一般的だ。  
草創期：約1万3000年～1万年前  
早期：約1万年～6000年前  
前期：約6000年～5000年前  
中期：約5000年～4000年前  
後期：約4000年～3000年前  
晩期：約3000年～2400年前

凸凹新聞  
2023年11月号 Vol. 3（2023年11月10日発行）

◆発行者  
相馬凸凹学会（代表・加賀新一郎）  
〒036-1592  
青森県弘前市大字五所字野沢41番地1  
（弘前市相馬庁舎内）  
電話：090-3102-6110（地域おこし協力隊）  
E-mail：souma.chiikiokosi@gmail.com

## 謎の空白を埋める 貴重な幻の土器

ただし、やや余談気味だが、少し付け加えておきたい。この二つの水田跡の発見をもって弥生時代と称するのは、専門家の間でも意見が分かれている。というのも、両遺跡の水田は何らかの理由で紀元前一世紀ごろには放棄され、以後七〇〇年ほど青森県内で水田稲作が行われた形跡がないからだ。また、弥生時代を象徴する弥生土器・金属器が見つかっていないことから、弥生時代と呼ぶことに否定的な見解があるのもたしかである。しかし少なくとも「弥生的」な文化への移行は進んでいた。たとえば、砂沢遺跡から出土した砂沢式土器は縄文の色合いが比較的濃く、対して垂柳遺跡から出土した土器は弥生土器の影響が強くなっている。

ただ、両遺跡の年代におよそ三〇〇年の差があり、その間、水田稲作や土器の変遷がどのように進んだかは、いわばミッシングリングとなっていた。その空白を埋める手がかりのひとつが、相馬で最初に発見された「五所式土器」である。



五所式土器が発見されたのは大森山北麓のなだらかな斜面で、正式な地番は水木在家桜井になる (©Google Earth)

「五所式」の五所とは相馬の五所のこと、と前述したが、土器が発見された大森山北麓の正確な地番は、水木在家桜井だった。当時、大森山は「五所の山」と通称されていた。またゴロもいいことから「五所式土器」という名になったそう。

### 発見者は 弘前工高の高校生

この「五所式土器」が発見されたのは、昭和三十五年（一九六〇）のこと。さぞ学識高き研究者

が見つけたのだろうと思いきや、発見したのは弘前工業高校に通う高校生だった。授業だったのかクラブ活動だったのかは不明だが、土器の破片がよく出るこのあたりを先生と生徒十人ほどがよく発掘調査していたそう。ある晩、生徒の一人がみかん箱いっぱい土器片をもって顧問の先生宅を訪れた。その破片はあまり見たことのない珍しい土器の破片だった。顧問の先生がその破片を弘前大学の教授に鑑定してもらったところ、新しい夕



清水森西遺跡から出土した五所式土器の破片。砂沢式に比べ器壁が薄く、文様の沈線が細い (弘前市文化財課所蔵)

イブの土器だったことが判明した。残念ながら「五所式土器」の出土例は少なく、また土器全体が出土した例もない。ただ、年代的には砂沢式土器とその後、の田舎館式土器の中間くらいにあたり、青森圏域の水田稲作の変遷を探るうえで大変重要な史料とされている。

今年九月に弘前大学北日本考古学研究所（上條信彦センター長）が発掘・調査した清水森西遺跡（弘前市十面沢）

からは多数の「五所式土器」が出土している。土壌からは炭化米も見つかり、この遺跡付近で比較的安定して水田稲作が行われていた可能性が高くなった（ちなみに、主に「五所式土器」が出土する集落を「五所式集落」と呼ぶ）。

北東北の水田稲作について、何か新しい進展が見られるかもしれない。そのカギを握るものひとつが、「五所式土器」なのである。

(文責・加賀新一郎)

#### ●相馬凸凹学会とは

津軽平野の南端に位置し、台地と平地が入り組んだ凸凹地形の相馬の歴史を地形・地理・地名といった新たな視点も加えて調査・研究・記録するサークル。

#### 【参考文献】

相馬村誌編集委員会『相馬村誌』（相馬村）、三浦稔『わがふるさと』、根岸洋『東北地方北部における縄文／弥生移行期論』（雄山閣）、村越潔『東北北部の縄文式に後続する土器』（研究論文）、根岸洋『弥生時代前期における「津軽海峡文化圏」について』（研究論文）